

# 「が」と「を」の交替と「他動性」 ：コーパスを利用した検証

藤村逸子（名古屋大学国際開発研究科）

寺島啓子、寺島佳子、萩原由貴子（名古屋大学国際言語文化研究科）

大曾美恵子（名古屋大学国際言語文化研究科）

## 1. はじめに

日本語の、願望文（「たい」）、可能文（「れる・られる」）、および「好きだ」、「嫌いだ」、「ほしい」、「わかる」、「できる」を述語とする文では、対象を表す名詞句をマークする格助詞として「が」または「を」を使用することができる。本稿の筆者の一人の藤村は、1989年に、この問題に関する論文を発表した（"Un cas de manifestation de degré de transitivité : l'alternance des relateurs GA et O en japonais"（他動性の度合の表れの一例：日本語における「が」と「を」の交替）*Bulletin de la Société de Linguistique de Paris*, 87-1）。本稿の目的は、この論文の紹介を通じて、その当時に利用した方法論の限界を明らかにし、大規模コーパスを利用した方法によって、同じ問題をどのように解くことが可能になるかを提示することである。

藤村は1989年の論文の中で、「が」と「を」との交替を説明する原理として、Hopper & Thompson による他動性仮説（Transitivity Hypothesis）を支持した。H&Thは、他動性を、複数の独立した要因の束からなるものとして提案している。「が」と「を」の交替にも、あとで見ると多数の要因が関与しており、これを説明する原理として、他動性仮説は大変魅力的であった<sup>1</sup>。また現に、1982年には Sugamoto が、「が」と「を」の問題と H&Th の他動性とを関係づけた論文を発表していた。Sugamoto は、対象を示す名詞句のマーカとして「が」を要求する文は他動性が弱く、典型的な他動性のマーカである「を」を要求する文は他動性が強いと論じた。Sugamoto は、願望文（「たい」）、可能文（「れる・られる」）、「好きだ」、「わかる」などは、普通は「が」を要求する述語であるとして、「が」と「を」の交替に関する詳細な検討には踏み込んではいない。藤村も Sugamoto と同様に、「が」と「を」の交替の問題は他動性の度合の差異の問題であると考えている。しかし藤村は、H&Th の提案をそのまま支持したわけではない。「が」と「を」との交替、および、他の言語にみられる同種類の問題を詳しく検討するうちに<sup>2</sup>、この交替の説明原理として「他動性仮説」を採用するならば、H&Th の提案には修正を加える必要があるように思われた。H&Th の他動性は、論文のタイトル、Transitivity in Grammar and Discourse が示すとおり、つまるところ、ある文、あるいはある命題（proposition）の、ディスコースの中での卓立性（Saliency）である。たとえば、「水が飲みたい」と「水を飲んだ」を比べた場合、「水を飲んだ」の方が他動性が高いのは、あえて単純化して言うならば、「水を飲んだ」は「水が飲みたい」よりも「できごと性」が強く、談話において、ストーリーを展開する力があるからだということになる。藤村はこの考え方を根本的に否定するものではないが、「が」と「を」の交替に関しては、「他動性」を、対象を表す名詞句の、「被動作主」としての卓立性（Saliency）と定義する方が事実をうまく説明するように思われた。藤村の考えでは、「を」でマークされる対象は、「が」でマークされる対象よりも、命題の中での「被動作主」としての卓立性が高い。対象を表す名詞句が「が」によってマークされる場合には、命題の重心はもっぱら主語名詞句におかれ、1項的にそれを描写する文になる。一方、第2の名詞句が「を」

によってマークされる場合には、命題の重心は主語名詞句のみに偏らず、「を」でマークされた目的語名詞句にもおかれ、2項的な命題となる。

研究の方法として用いたのは、なによりもまず、藤村自身のネイティブ・スピーカーとしての直感である。しかし、「が」と「を」の交替の問題に関して、この方法は、心もとないものであった。たとえば次のような場合である。

- (1) あの子はまだ字(が/?を)読めない。
- (2) あの子がまだ字(?が/を)読めないとは知らなかった。
- (3) 先生にセーター(?が/を)贈りたい。
- (4) 先生にお礼(が/を)言いたい。

クエスチョンマークをつけた例文は藤村にとっては、若干不自然であると思われた例であるが、その差は微細であり、そのわずかな差を基にして論を展開するのは、ためらわれた。

そこで次に試みたのは、インフォーマントによるアンケート調査であった。15人のインフォーマントに例文を見せて容認可能性の判断を求め、それを数値化して論拠とした。たとえば、例文(3)の「が」は、15人中5人にとって不自然な文であったが、例文(4)の「が」は、15人全員が自然であると答えた。例文(5)では、15人中5人のみが自然と答え、例文(6)では15人全員が自然と答えた。どの例においても「を」は15人全員にとって自然であった。

- (5) ?保育所に赤ちゃんが任せられるものか (5/15)
- (6) コンピュータに仕事が任せられるものか (15/15)

この方法は、一人の判断ではないという意味において、よりよい方法ではある。しかし、(5)と(6)の両方を容認可能であると判断するインフォーマントの存在をどのように理論的に説明するのかという問題が残る。また、数値のわずかな差異は、確かな証拠というには程遠いと思われた。今にして思うと、統計処理ができるだけの数のインフォーマントを集める必要があったのであるが、その当時、文法性の判断に関して統計処理を行うような言語学の論文は存在しなかった。

第3の方法として用いたのは、事例の調査である。もちろん電子媒体ではない。利用したのは、以下の3冊の小説であり、「が」と「を」の交替に関わる例文は約150例収集できた。

- 宮本輝：『ドナウの旅人』、1985、新潮社、390p
- 川端康成：『古都』、1968、新潮文庫、228p
- 五木寛之：『内灘夫人』、1972、新潮文庫、497p

調査結果(表2)は、可能文と願望文を比べると、可能文の方に「が」が多く用いられ、願望文では「を」が多いことを明らかにした。また、『ドナウの旅人』は、他の2つに比べて「を」の使用が顕著に多い。このような事実は、「を」の使用は非標準的で例外的であるとしたそれまでの考え方を修正するものであり、一定の価値はある。しかし、個々の多様な条件を分析するには、用例数の点で限界があった。また、出現頻度が少ない上に、「を」の使用がとくに稀な「わかる」、「できる」、「ほしい」に関しては、この程度の規模の資料では、何も言えないに等しかった。

インフォーマントに判断を求めるアンケート調査も、事例の調査も、規模が限られているのであれば、結局のところネイティブ・スピーカーの直感を補佐するにすぎない。

仮説を裏付ける役割を果たすことはできたとしても、仮説を覆したり、新しい事実の発見によって仮説を発展させたりするものではないといえるだろう。

以下、第2章では、上記論文の全体を翻訳して紹介する。第3章では、この交替の現象に関して、大規模電子コーパスから明らかになったことを提示する。

## 2. 日本語における「が」と「を」の交替：他動性 (Transitivity) 度合の表れの一例

### 2.1. 序

本研究は、他動性の仮説を再定義することを目的としている。Hopper & Thompson による他動性仮説に修正をほどこして用いることによって、例文(7)~(10)に見られるような、格助詞「が」と「を」のあいだの交替の現象が説明できるようになると思われる。この交替は、以下の述語において観察される。

- 形容詞 (形容動詞) 述語：ほしい、好きだ、嫌いだ
- 動詞述語：できる、わかる
- 形容詞複合述語 (願望文)：動詞+たい
- 動詞複合述語 (可能文)：動詞+れる・られる

(7) 太郎が花子が好きだ (ということ)

(8) 太郎が花子を好きだ (ということ)

(9) 私が水が飲みたい (こと)

(10) 私が水を飲みたい (こと)

この問題には、すでに多数の先行研究がある。しかし、「が」と「を」の機能は何か、どのような条件で交替が起こるのか、なぜ交替が起こるのかといった基本的な点に関して、先行研究はほとんどなにも教えてくれない。学校文法から生成文法などの理論的研究にいたるまで、「を」の使用は、例外的・非標準的といわれることが多い (ex. 佐久間(1940)、国立国語研究所 (1951) Sugamoto(1982))。柴谷(1978)は任意であるといっている。牧野(1976)は、この現象の説明に取り組んだ先駆的な論文であるが、Haig(1979)によって批判されているように、全容の解明にはいたっていない。この現象が、いまだに十分な説明を与えられていない理由として、まず、「が」か「を」かの選択の条件が多岐に渡り、かつ微細である点が挙げられる。第2に、研究の枠組みとして、日本語の文を扱う際に、文法関係(relation grammaticale)、参与項間の関係 (relation actancielle)、主題構造関係(relation thématique)が混同されがちであり、そのために研究が進みにくいという点が挙げられる。

参与項間の関係というのは、述語(P)によって表される「プロセス」に参加する「参与項」同士の関係である。主題構造関係というのは、情報構造上の「主題」、すなわちひとつの発話の中で情報の支えとなるものと、残りの部分との間の関係である。「が」と「を」との交替は、明らかに参与項間の関係の問題である。なぜならこの現象は、主節にも従属節にも発生する、「命題内」的問題だからである。情報構造関係は、一般に、従属節の中で観察することは困難である。従属節は、発話を構成しないからである。「が」と「を」の交替は、命題内の参与項間の関係として取り扱うのが適切である。

しかしここで、日本語は、主題構造関係が優位な言語だということを考慮せねばならない。日本語では、発話内に「主題」が存在する場合、主題の表示が、参与項間の関係の表示よりも優先されるため、参与項間の関係は潜在的なものになることが多い。「が」と「を」でマークされるはずの名詞句が「主題」でもある場合には、「は」が表面化し「が」と「を」は潜在化する。「がは」、「をは」の連続は非文法的である。ほかの助詞は、主題

のマーカ―と共存できる。

- (11) 太郎が 花子に 本を やった
- (12) 太郎は 花子に 本を やった
- (13) 本は 太郎が 花子に やった
- (14) 花子には 太郎が 本を やった

これらの例において、「太郎が」は「太郎は」と主題関係において対立する。「太郎が」は「レーマ的」であり、「太郎は」は「テーマ的」である。同じことが、「本を」と「本は」、「花子に」と「花子には」にも言える。しかし、参与項間の関係は、上の4例のすべてにおいて共通である。この共通の関係の把握のためには、「は」が用いられている場合には、それが「が」と置換可能なのか、「を」と置換可能なのかをテストする必要がある。

問題の文にもどると、文脈から切り離された独立文では、「主題」が含まれている(15),(16)の方が、含まれていない(7) (10)よりも落ち着きがよいが、次のような分析は、レベルに混乱があるため採用しない。

- (15) 私は 水が のみたい  
主題 主語 述語(P)
- (16) 私は 水を 飲みたい  
主題 目的語 述語(P)

本稿では「主語」「目的語」などの用語を用いず、次の用語を用いる。

- 第1補語(C1):「が」でマークされているか、「が」と置換可能な「は」でマークされた補語
- 第2補語(C2):「を」でマークされているか、「を」と置換可能な「は」でマークされた補語
- 第3補語(C3):「に」でマークされた補語

ゆえに、問題とする交替は、 $C1+C1+P$  と  $C1+C2+P$  の交替ということになる。また、最初に現れる C1 をその典型的な意味役割から仮に「動作主」とよぶ。C2 と2番目にあらわれる C1 を、かりに「被動作主」とよぶ。

$C1+C1+P$  は他動性の低い命題であり、 $C1+C2+P$  はそれよりは他動性の高い命題であるというのが本論文の仮説である。他動性とは、意味的な概念であり、「被動作主」の役割を果たす参与項の卓立性 (Saliency) の度合」と定義する。2項述語の場合には、「被動作主」の役割を果たす項の卓立性が高いほど、他動性は高くなる。他動性が高くなるにつれて、命題のつたえる意味内容の重心は、「被動作主」、および「被動作主」が「プロセス」からこうむる影響に、おかれるようになる。逆に、「被動作主」の卓立性が低いほど、他動性は低く、命題は、「動作主」にのみ関わるものになる。その場合、「被動作主」は、述語の中に意味的に抱合されるようになり、述語と一体化して、「主語 (=動作主)」を描写したり、修飾したりすることになる。

他動性の定義に関わる本質的な要因は次のとおりである。

- 指示対象における被動作性
  - 蒙る影響の強さ
  - 蒙る影響の全体性

- 話し手にとっての「被動作主」の重要度
  - 話し手からの近さ<sup>3</sup>
  - 談話の中での主題性

ここで取り扱う構文は、もともと他のタイプの文に比べて、他動性が低い文である。たとえば、「(暗闇で)だれかが私を殴った」というのは、他動性の高い命題内容をもつ。この文では、できごとの終末に命題内容の重心があり「被動作主」が焦点となっている。逆に、「動作主」についてはほとんど何も述べられてはいない。「動作主」は、不定名詞句であり、「被動作主」は話者本人である。また述語は、「被動作主」になんらかの影響が与えられることを意味するタイプのものである。このような文とは違って、願望文、可能文、「好きだ」、「嫌いだ」などにおいては、被動作性の高い「被動作主」を想定することは難しい。「彼は木の枝を折った」「彼は木の枝が折りたかった」「彼は木の枝が折れなかった」を比べたとき、もっとも大きな影響を受ける「被動作主」が第1の文のものであることに疑いはないであろう。願望文、可能文などにおいては、「動作主(=主語)」の状況、状態について述べられるのであり、「動作主」による行為の結果、「被動作主」になんらかの変化が実現するというようなタイプの内容を表すわけではない。それは、C1+C1+Pの形であれ、C1+C2+Pの形であれ同じである。しかしそれにも関わらず、後で見ると、この交替を条件付ける要因は、他動性の定義的要因として挙げた要因のどれかに還元することが可能である。発話を構成する様々な要素が関係しているため、一見すると、この問題には多種多様な要因が複雑に絡まりあっているように見えるが、実は「他動性」という、単純なひとつの原則が支配していると考えられる。

2.2では、まず願望文と、可能文の構造をより注意深く観察する。2.3では、さまざまな条件を提示する。2.4節では実例の観察を行う。

## 2.2. 願望文と可能文

「たい」は、「動作主(=主語)」である人間の、なにかをしたい(されたい)という願望を表す。この補助形容詞は、高い主観性を備えている。すなわちデフォルトでは、願望の主体は、発話者それ自身である。発話者以外の主体の願望を、この構文を用いて表すためには、発話者がその人間の願望を何らかの方法で知ったということを、「たいそうだ」、「たいのだ」、「たいらしい」などを使って、明示的に表現しなければならない。

「-たい」が後続することによって、格形が変化するのは、2項動詞の第2補語だけである。格形の交替は、「が」と「を」の間のみおこる。

- 1項動詞の場合  
私が行く      私が 行きたい(こと)
- C1とC2を要求する2項動詞の場合  
私の本を買う      私が本(が/を)買いたい(こと)
- C1とC3を要求する2項動詞の場合  
私と彼に会う      私が 彼に 会いたい(こと)

可能の助動詞の「れる・られる」は、動詞の表す行為や行動の「潜在性」を示す。「潜在性」の概念は、「動作主」が望む限り、行為を行うことを妨げるような制約は存在しないこと、あるいは、逆に否定文では、「動作主」がコントロールできない制約の存在のために、行為は遂行されないということを表す。制約とは、「動作主」に内在した能力の限界の場合もあるし、「被動作主」の性質や、その他の外的な条件である場合もある。日本語の可能文は、フランス語の *pouvoir* や、英語の *can* が示すような、モーダルな「可能

性」すなわち、事態発生の確かさに関する発話者の判断を表現することはできない。

可能文は、願望文よりも複雑である。なぜなら、上で見た構造に加えて、第3の構造である、C3+C1+Pがあるからである。

1. C1+C1+P: 太郎がフランス語が話せる(こと)
2. C1+C2+P: 太郎がフランス語を話せる(こと)
3. C3+C1+P: 太郎にフランス語が話せる(ものか)

C1+C1+P と C3+C1+P の違いを考えよう。「可能」の用法の極端なケースとして、2つのCのうち的一方のみ(「動作主」または、「被動作主」)の属性を表すものがある。たとえば、次の例は省略文ではない。

- (17) この酒は飲める
- (18) 太郎は飲める

「飲む」は普通の用法ではC1とC2を要求するが、可能文において、(17)のように「被動作主」がC1になり、しかも「動作主」がまったく含意されない場合には、文は「被動作主」の「(人に)飲まれる対象としての適性に関する属性」を示すことになる。逆に(18)のように、「被動作主」がまったく含意されない文では、「動作主」の能力、すなわち、「(酒を)飲む能力」が表される。可能文では、その用法の両極において、潜在的な「動作主」の属性を述べる文と、潜在的な「被動作主」の属性を述べる文を作り出すことができる。C1+C1+Pの文は、主に「動作主」の属性の描写に重点のある文であるのに対し、C3+C1+Pは、C1が「被動作主」となりうるかという点に重点のある文である<sup>4</sup>。C3+C1+Pでは、C3は、C1が実現するための条件として示されると考えられる。

願望文では、C3+C1+Pの文を作ることは不可能である。

- (19) \*私には本が買いたい。

願望文は主観的な文であるため、願望の主体は必ず、命題内の主たる参与項だからである。可能文は、できごとの潜在性を客観的に伝える文であるため、主体にも客体にも重点を置くことが可能である。冒頭に挙げた動詞の中では、「わかる」と「できる」は可能文と同じく、3つのパターンの格配置が可能であり、「欲しい」「好きだ」「嫌いだ」は願望文と同じく、2つのタイプが可能である。そのことは、述語の意味と大いに関係があると考えられる。

### 2.3. 「が」と「を」の交替の条件

本節では、C1+C1+PとC1+C2+Pの交替に関与する条件を提示する。この問題を扱った先行研究には、交替の条件がいくつか提案されている。たとえば、人間を表す名詞句は「が」と共起しにくいこと、名詞句が動詞と離れている場合には「が」と共起しにくいことなどである。確かに、これらは正しい条件であるように思われる。しかし、どの条件もそれ一つでは絶対的な条件とはならない。だがまた一方で、決定的に不自然な例文が存在することも事実である。

- (20) 父(\*が/を)このピストルで撃ち殺してしまいたい。
- (21) 花子は音楽(が/\*を)好きだ。
- (22) 希望者は随時、事務局まで連絡(\*が/を)とらいたい。

この事実は、「被動作主」の格形を決定するのは複数の条件の組み合わせであることを予測させる。これらの条件はとりもなおさず、命題の他動性の度合を決定する要因と考え

られる。以下では、他動性の構成要因と考えられるものをひとつずつ取り上げ、可能な限りミニマルなペアをなす例文を作って、条件の差異と「が」と「を」の容認可能性の関係を検討する。そして、「が」の使用を促進させる要因は、互いに矛盾することなく、どれもが他動性の度合を低下させるものであり、「を」の使用を促進させる要因は、他動性の度合を高めるものであることを明らかにする。

この研究は主に、15人のインフォーマント（20歳から40歳までの学生あるいは研究者）の容認可能性の判断に基づいている。infという表示のある例文の判断は、これらのインフォーマントによるものである。インフォーマントの判断は、全員同じというわけではない。条件が少し変わったからといって、容認度が変わるとは限らないからである。しかし、条件の変化に反応したインフォーマントの判断は、同様の傾向を示した。例文につけられた a b の表示は、条件の差異に反応したインフォーマントにおいては、文 b は文 a よりも容認度が高いということを表している。inf の表示のない例文の判断は、特に指定がない限り、藤村自身によるものである。

### 2.3.1. 構文

意味の条件の検討に入る前に、構造の条件を述べる。他の条件が同じであるなら、「を」が用いられやすいのは、単純述語よりも複合述語、すなわち、願望文と可能文である

- (23) 僕はフランス語（が / \*を）好きだ / できる / わかる
- (24) 僕はフランス語（が / を）話せる / 話したい

### 2.3.2. 現実 / 非現実

願望の表出のみを表し、その願望の実現が問題とされない、感嘆的な願望文においては、「が」の使用が適切である。逆に、願望の実現のための発話である場合には、「を」が適切である。次は Aoki (1984) の挙げている例である。

- (25) ああ、冷たい水が飲みたいよお！（砂漠の真ん中で）
- (26) ビールを飲みたいのですが、この辺に喫茶店はありませんか

現実 / 非現実の対立は、他動性の度合の構成要因のひとつである。詠嘆的に願望を述べて、その実現が考慮の外にあるとき、第2名詞句の「被動作主」性は、最小である。逆に、願望の実現のために発せられた発話の場合は、第2名詞句は、未来の「被動作主」である。

可能文においては、この問題は、実現の条件が外的であるか、内的であるかの問題として表面化する。「が」は、「動作主 (= 主語)」の能力が問題となる文、つまり、実現の条件が内的である場合に適切であり、「を」は、その条件が外的である場合に適切である。

- (27) 彼はフランス語が話せなかったので、ノイローゼになった。
- (28) 彼はフランス語を話せなかったので、ノイローゼになった。

この2つの文を対立的に解釈するなら、最初の文は「彼にはフランス語を話す能力がなかった」という解釈が適切であり、2番目の文は「彼には能力があったが、フランス語を話す外的な条件が整わなかった」が適切である。能力を問題にすると、それは一般的な属性の描写であり、出来事の実現は想定されにくい。それに対して、外的な状況が問題になるときは、「動作主」に能力のあることはすでに前提となっている。時空間に位置づけられたできごとの実現の可能性が問題になるため、目的語は「被動作主」としての扱いをうけているといえる。

### 2.3.3. 2番目の参与項の被動作性の度合

2番目の参与項の蒙る影響の度合は、「が」か「を」かを定める要因となる。「を」は強い影響を蒙る場合に用いられやすく、「が」はその反対である。被動作性には、「プロセス」の中で2番目の参与項が蒙る、物理的な変化、心理的な変化、位置の変化、価値の変化などが含まれる。

(29) ?親の顔がぶん殴りたい。 親の顔が見たい。 (inf: 11 15<sup>5</sup>)

(30) ?親の顔を見たい。 親の顔をぶん殴りたい。 (inf: 4 15)

「親の顔」は見られるより、殴られる方が強い影響を蒙ることは当然である。

(31) ?あの子は不器用だ。でもあの子は卵が割れる。

あの子はアレルギー体質だ。でもあの子は卵が食べられる。(inf: 3 15)

(32) ?あの子はアレルギー体質だ。でもあの子は卵を食べられる。

あの子は不器用だ。でもあの子は卵を割れる。(inf: 2 15)

文脈からわかるようにこれらは、「動作主」の能力が問題となっている文である。その条件において、「割る」は「を」と相容れやすく、「食べる」は「が」と相容れやすい。「割る」は、強い物理的影響を「被動作主」に与えるタイプの動詞であり、「食べる」は「被動作主」を「動作主」が吸収し、「被動作主」自体には影響の結果を想定させない動詞であるためであると思われる。

### 2.3.4. 人間か否か

「被動作主」が人間の場合には、「を」が「が」よりも好まれる。

(33) ?保育所に赤ちゃんが任せられるものか

コンピュータに仕事が任せられるものか (inf: 5 15)

(34) ?あの子がたたきたい。

あの太鼓がたたきたい。

この条件に関しては、曖昧性の回避のためという説明が与えられることが多い。人間を「が」でマークすると、「動作主」の解釈とのあいだで曖昧性が生じるというわけである。曖昧性を、言語学の論拠として用いるときには慎重であらねばならない。曖昧でも成立する文は多数存在するからである。また、この説明では、同じように人間を指していても、次の例のように自然さの度合が異なる例のあることが説明できない。

(35) ?若乃花が負けたい。

若乃花が見たい。

人間は、心理的な実体であるために、どのような出来事からも影響を受けうる。したがって、人間にはどのような出来事においても「被動作主」となりうる。また、人間において生じる被動作性は、人間以外の者に生じるものと比べて、同じく人間である発話者にとって一般に重大であるため、命題の中心的問題となりやすい。そのために人間を表す名詞句は「を」と相性がよいと考えられるだろう。

### 2.3.5. 限定度

限定度の高い「被動作主」は、「を」をとる傾向がある。限定度が低ければ「が」が好まれる。日本語では、限定詞を名詞に付与することは義務ではないため、「が」と「を」の対立が、限定の度合を示す場合もある。たとえば次の例である。(36)では、「車」が限

定されていると解釈され、したがって、「自分の車を個人的に売りたい」という解釈が適切である。反対に(37)では「車」は限定されていないと解釈され、「仕事として車を売りたい」という意味が適切である。

- (36) 車を売りたい。  
(37) 車が売りたい。

しかし、名詞の限定度が別の方法でマークされている場合には、その限定度に応じて「を」と「が」の使用傾向が定まる。

- (38) ?朋ちゃんが愛せないような人は普通じゃない。  
赤ん坊が愛せないような人は普通じゃない。 (inf: 6 15)  
(39) ??山田さんの息子が殺したい  
人が殺したい (inf: 5 15)

この条件も、他動性の条件の一つである。「被動作主」が定名詞句の場合には、そこに起こる結果がクローズアップされうるが、不定の場合にはそうではない。

#### 2.3.6. 具体 / 抽象

「被動作主」が具体物であれば、「を」が好まれ、抽象概念であれば「が」が好まれる。

- (40) ?先生にセーターが贈りたい。  
先生にお礼が言いたい。 (inf: 10 15)  
(41) 私はどうしても母が死んだことを信じられない。  
私はどうしても夫を信じられない。 (inf: 6 15)

ここでも同じ説明が可能であろう。抽象的概念は、典型的な「被動作主」ではない。

#### 2.3.7. 人称

1人称と「が」の相性はきわめて悪い。

- (42) ?\*彼は私が忘れたいのです。  
彼は花子が忘れたいのです。  
(43) ?\*彼は私が無視できるようになった。  
私は彼が無視できるようになった。 (inf: 9 15)

「私」が「被動作主」である場合、そこに生じる変化や結果は、発話者である「私」にとって重要である。ゆえに命題の他動性は増加する。反対に、「私」が「動作主」の場合には、「被動作主」の重要性は相対的に低下し、他動性は低下する。

#### 2.3.8. アスペクト

述語に完了アスペクトを表す表現が含まれている場合には、「を」が使用される傾向がある。未完了アスペクトの述語(状態など)の場合は、「が」が用いられやすい。

- (44) ?三日でセーターを編めます。  
三日でセーターを編んでしまえます。 (inf: 10 15)  
(45) 三日でセーターが編んでしまえます。  
三日でセーターが編めます。 (inf: 6 15)  
(46) 壁紙が貼ってしまいたい  
壁紙が張ってみたい (inf: 11 15)

完了の補助動詞「しまう」は「を」と相容れやすいのに対し、完了を含意しない補助動

詞の「みたい」は「が」と相性がよい。完了の助動詞の使用は発話者の関心がプロセスの最終相にあって、始発相にはないことを示す。アスペクトは、「他動性」の問題と深いかわりがある。2項述語の場合の完了アスペクトは、必然的に「被動作主」に焦点をあてることになるからである。

### 2.3.9. 主題

「動作主」が「は」でマークされる場合、すなわち話し手と聞き手のコミュニケーションの支えという役割を果たす場合には、「動作主」に注意が集まるため、相対的に第2参与項の重要度は下がり、「が」でマークされる傾向が強い。逆に、「動作主」が主題でない場合には、第2参与項の重要性が相対的に高くなり「を」が用いられるようになる。このようにして、主題構造関係は、参与項間の関係に影響を与える。

- (47) あの子はまだ字(が/?を)読めない。
- (48) あの子がまだ字(?が/を)読めないとは知らなかった。
- (49) 太郎は花子さん(が/?\*を)好きだ。
- (50) 太郎が花子さん(が/を)好きだということは有名だ。

主題性に関わるこの条件は、名詞句と述語との距離が離れるほど「が」が用いられなくなるという事実とも関係があるように思われる。

- (51) ビール(\*が/を)家でゆっくりのみたい。
- (52) 家でゆっくりビール(が/を)のみたい。 (井上 1986)

語順に関する一般的原則からして、発話の先頭近くに現れる名詞句は、主題性が高く、情報量は少ない。逆に、末尾近くに現れる名詞句は、情報量が多いと考えられる。つまり、情報量の少ない名詞句であるほど「を」でマークされやすく、情報量の多い名詞句は「が」でマークされやすいといえるのではないかと思われる。

表1は、以上で検討した「が」と「を」の交替の条件をまとめたものである。これらの条件はそれぞれが独立しているが、互いに矛盾するものではない。右側の列の要因は、命題の他動性を高める要因であり、左側の列のものは、他動性を低める要因である。これらは、網羅的なものでは決してなく、他にも様々な条件が関与しているに違いない。しかし、新たに発見される条件も、「を」が好まれるのは「被動作主」として卓立性の高い名詞句においてであり、「が」が好まれるのは、「被動作主」としての卓立性の低い名詞句であろうと予測できる。

	「が」が好まれる	「を」が好まれる
	被動作性弱	被動作性強
「被動作主」の性質	不定	定
	不特定	特定
	抽象	具体
	非人間	人間
	3人称	1人称
	情報量大	情報量小
「動作主」の性質	1人称	3人称
	主題	非主題
アスペクト	未完了	完了

ムード	非現実	現実
	潜在的	顕在的

表1 : 「が」と「を」の交替の条件

#### 2.4. 実例の観察

表2は、次の3冊の現代小説における「が」と「を」の生起頻度を示したものである。

- 宮本輝：『ドナウの旅人、上』、1985、新潮社、390p
- 川端康成：『古都』、1968、新潮文庫、228p
- 五木寛之：『内灘夫人』、1972、新潮文庫、497p

	ドナウの旅人		古都		内灘夫人		計	
	が	を	が	を	が	を	が	を
可能文	4	17	5	2	10	1	19	20
願望文	3	14	2	5	7	13	12	32
わかる	19	2	2	0	2	1	23	3
できる	1	2	0	0	0	0	1	2
好きだ	2	7	7	0	6	2	15	9
嫌いだ	2	3	2	0	1	0	5	3
ほしい	1	0	1	0	1	0	3	0
計	32	45	19	7	27	17	78	69

表2 : 「が」と「を」の生起頻度<sup>6</sup>

数値を見るとまず、作品によって「が」と「を」の出現傾向の異なることが目をひく。「ドナウの旅人」では、「を」の使用が他と比べて明らかに多い。可能文、願望文、「好きだ」、「嫌いだ」では、「が」は「を」より多用されている。

作者は、「が」と「を」の選択を気まぐれに行っているわけではない。たとえば、「ドナウの旅人」の願望文では、「を」の14回に対して、「が」が次のように3回使われているが、3例とも、「被動作主」は、人間ではない不定の指示対象であり、被動作性が弱い。

- (53) 麻紗子はキリンが見たかったのだ。(p.48)  
 (54) シギイは、絹子に、どんなものが食べたいのかと聞いた。(p.174)  
 (55) 水が飲みたいの? (p. 257)

逆に、「わかる」とともに使われている「を」は2回のみではあるが、どちらも定の人間が対象である。

- (56) シギイは私のことをなんにも判ってないのね。(p.136)  
 (57) ペーター・マイヤーという人間をなんにも判ってはいないくせに。(p.114)

一方、「わかる」が「が」と共起する次の例では、対象は抽象名詞である。

- (58) そんな絹子が、普段よりも猛々しい私によってなぜ傷つくのか。旅に出て、私はその理由が少しずつわかってきました。(p.229)

次に「ドナウの旅人」の可能文においては、「を」の17回に対して、「が」は次のように4回のみ出現する。

- (59) 彼は嘘がつけなかった。そのとび色の目は、シギイのことを言っているのを如

- 実に伝えていたのだった。(p.54)
- (60) 父はお酒がのめない人ですから、母は冷蔵庫とレンジのあいだに隠してるんです。(p.202)
- (61) 私はドイツ語が話せないもんで、不自由してたんです。(p.349)
- (62) この人、今日は気がはやってるのよ。おにぎりやかますの干物がたらふく食べられるもんだから。(p.93)

(59),(60),(61)は、主題主語の属性としての能力のなさを述べた文である。最初の文の「が」を「を」に置き換えて、「彼は嘘をつけなかった」とすれば、「彼は嘘をつこうとしたが、なんらかの外的な理由により、それが果せなかった」という意味になるであろう。そうすると、文は、主語の属性についてのみ語る文ではなくなる。「嘘」は、なんらかの特定の「嘘」であり、この項の重要性は高まる。(62)は、主語の属性を述べる文ではない。しかし、「食べる」は他動性の高い動詞ではないし、接続詞に「や」が使用されていることが示すとおり、その対象は不確定である。これを、「おにぎりとかますの干物」とするなら、「を」が選択される可能性は高くなると思われる。

しかし、この「食べる」が使われながら、次の文では「が」を使用できない。

- (63) 暖めたワインで卵の黄身を攪拌していきながら、大量の砂糖を混ぜて、ガラスの容器になみなみと注ぐその菓子を、麻紗子は今までにスプーンに4杯以上食べられたことはなかった。(p.44)

いくつかの理由を挙げるができる。まず、「菓子」に長い修飾語句がつき、かつ「その」という限定詞も加えられている。つまり「菓子」は限定度が高く、かつ、修飾の対象でもある。次に、この名詞句の位置である。第1の条件とも関連するが、この名詞句は、「は」によって主題として表示された「動作主(=主語)」よりもさらに先の、文頭におかれている。3番目は、述語のアスペクト的意味である。この述語では、プロセスの終点部分に焦点があり、「その菓子を食べる」という行為を完了することが一度も起こらなかった」という意味を持つ。「食べられなかった」であれば、終了相の指定なく、単に行為の起こる可能性がなかったということである。これらの複数の条件が重なって、この文で「が」を選択することは不可能となっている。

ほかのテキストも同じ傾向をしめす。「古都」の願望文における、5回の「を」に対する、2回の「が」では動詞は「見る」である。

- (64) なぞの捨て子の顔が見たいな。(p.25)
- (65) くすのきが見たいのやろ。(p.159)

(64)ではさらに、プロセスの実現は不可能である。「が」でマークされた名詞句には、指示対象が存在しないからである。

「内灘夫人」においては、「を見たい」が存在する。しかし、この場合、その対象は、「あなた」である。それはまた、実現可能なできごとであるとして表されており、直接的で無遠慮なニュアンスが付け加わる。コンテキストからは、この文は、男が女に言い寄り、女の気持ちを変えようとするプロセスをさしていることがわかる。

- (66) 「どうして？」  
と霧子は言った。  
「どうしてそんな無意味なことをなさるの？」  
「あなたに関心があるから」  
男は静かな口調で喋り出した。

「二度目の電話で、ぼくはあなたの名前を知りました。ぼくが会ってほしいとたのんだが、あなたは受け入れなかった。だが、ぼくはどうしてもあなたを見てみたいと思った。・・・」 (p.259)

柴谷(1978)は、「が」と「を」の使用が任意であることをいうために、同じ作家が、同じ作品で「が」と「を」を使っている次の例をあげている。

- (67) 村井さんは子供がお嫌いらしいですね。  
あなたはうちの子をお嫌いでしたものね。(三浦綾子、『氷点』)
- (68) 彼女が好きなんです。  
あたしを好きなんでしょう。(五木寛之、『ローマ午前零時』)

柴谷の意図は、「が」と「を」は入れ替えが可能であると示すことであるが、これらの例は、本稿の説明にうまく合致する例だと言える。(67)では、「子供」は、総称として解釈される。一方、「うちの子」は特定の子供であり、さらに、発話者にとって大事な自分の子供である。(68)でも同じことが言える。1人称が「を」でマークされ、3人称は「が」でマークされやすいことは、我々の仮説から予測が可能である。

#### 2.4. 結論

以上、「が」と「を」の交替の条件の検討し、実例を観察した結果、C1+C1+P と C1+C2+P の差異は次のように図式化することができると思われる。



図1 : 「が」と「を」の交替と他動性

Actant の定義は、Tesnière(1959)による。Actant はプロセスに参加するものの中で前景にある参加者である。C1+C2+P では、C2 は Actant と呼ぶに値する参加者である。一方 C1+C1+P においては、2 番目の参加者は Actant とは呼べない。それは、プロセスの中に包含された参加者であって、Adjunct (補助項) と呼ぶにふさわしいものである。補助項はプロセスと一体化して、第1の Actant を修飾したり、特徴付けたりする。他動性が連続体であると同様、参与項と補助項の関係も連続している。このような C1 の特徴は、一般に主語と呼ばれるものの特徴からかけ離れている。日本語には、C1+C1+P という構文が存在することを再認識せねばならないだろう。

本稿で行ったような他動性の定義は、「が」と「を」の交替を説明するために少なくとも必要である。日本語に、あるいは他の言語に、この定義を必要とするような言語現象がほかに存在しないかということは、大変興味深い問題である。

### 3. 電子コーパス「毎日新聞、1991-99」を利用した調査

本節では、再定義した「他動性の仮説」によって、「が」と「を」の交替が説明できるかどうかの検証を、電子化された大規模コーパスを利用することによって行う。上で見たように、手作業による用例収集では、統計的に有意な数の例を集めることは容易ではない。以下では「欲しい」、「好きだ」、「嫌いだ」、「分かる」、および、複合述語の願望文を取り上げ、「が」と「を」の交替の条件を計量的方法によって明らかにする。

#### 3.1. 方法と検索の条件

検索には、主にオンラインの検索プログラム「茶漉」を利用した。コーパスは、毎日新聞の1991年から1999年までを主として利用した。総語数は2億語を超え、規模は膨大である。検索の条件は以下のとおりである。

- ◆ 「を」または「が」の直後に「欲しい」、「分かる」、「好きだ」、「嫌いだ」の「全活用形」がくる用例
  - 「欲しい」「分かる」: 1991年から1999年まで(9年分)
  - 「好きだ」「嫌いだ」: 1997年から1999年まで(3年分)
- ◆ 「を」または「が」の直後に「動詞」+「たい」の「全活用形」がくる用例<sup>7</sup>(ex. 水が飲みたい)
  - 1997年のみ(1年分)
- ◆ 「を」または「が」の直後に「名詞」+「し」+「たい」の「全活用形」がくる用例(ex. 英語を勉強したい)
  - 1997年から1999年まで(3年分)

ひらがなや、他の漢字で表記された「すきだ」、「判る」などの述語は検索から除外した。

すでに述べたように、述語の直前の位置に第2項名詞句がおかれるときには、「が」の使用が一般に促進される。よって、本節の例文は、文法的観点からは、「が」がもっとも選択されやすい場合である。この条件から外れると、「を」の使用が増えるはずである。

機械的な検索では、不要な例がさまざまなレベルで含まれるため、例文を確認し、手作業によってそれらを削除する必要がある。たとえば、「が」が「動作用主」をマークしている例は削除しなければならない(ex. お客さんが欲しいのは、単なる天気予報じゃない)。また、「欲しい」のうしろに「がる」が続くと、「被動作用主」のマーカーとして自動的に「を」が選ばれるため、これも削除しなければならない。「～を分かりやすく～する」のように、「を」が本稿で問題にする述語ではなく、別の述語の補語にともなって現れる場合も削除の対象である(ex. インテリアのさまざまなスタイルを分かりやすくまとめた)。さらに、新聞データには、かなりの重複が含まれるため、一定の条件のもとで重複データを削除しなければならない。このようなデータの確認・不要例の削除作業と、データの管理・分析は、Microsoft Excel を使って行った。例文を、1例1レコードのデータベースとして保存し、例文ごとに必要な情報を付加して、「が」と「を」の出現頻度と要因との関係を分析した。

残った例文の数は表3の通りである。図2は、表3の数値を百分率にして表示したものであるが、大きな偏りのあることが明確である。「欲しい」に「を」は出現しにくく、「たい」には「が」が出現しにくい。とくに、「名詞+したい」と「が」との共起が4436例の中に1例も観察できなかったことは、大変興味深い結果といえるだろう(ex. 「～ことを期待したい」、「協力をお願いしたい」、「存在をアピールしたい」)<sup>8</sup>。

述語の種類	を	が	総計
欲しい	73	2305	2378
好きだ	202	2443	2645
嫌いだ	22	262	284
分かる	397	4583	4980
動詞+たい	5796	273	6069
名詞+したい	4436	0	4436
総計	10926	9866	20792

表3：述語の種類と「が」vs「を」(実数)

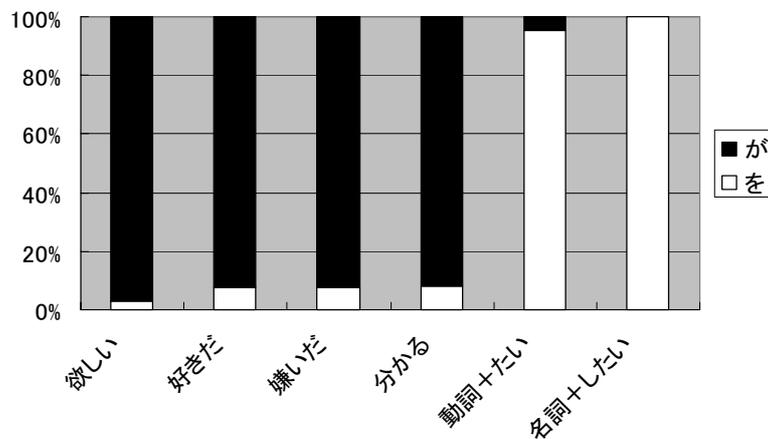


図2：述語の種類と「が」vs「を」

以下ではこれらのデータをつかって、次の要因が格助詞の選択に関与することを報告する。

- 「被動作主」名詞句の意味特性 (分かる、好きだ、動詞+たい)(3.2)
- 述語に後続する補助動詞の種類 (分かる、好きだ、嫌いだ)(3.3)
- 述語が言い切りで終わっているか、引用形式か(欲しい)(3.4)
- 動詞のタイプ(動詞+たい)(3.5)
- 「被動作主」名詞句の限定(名詞+が/を+したい)(3.6)
- 人称(3.7)

### 3.2. 「被動作主」名詞句の意味特性

表4には、単純述語の、「欲しい」、「好きだ」、「嫌いだ」、「分かる」の直前に現れる「被動作主」名詞句を、出現頻度順に上位5位まで挙げた。

述語	頻度順位	名詞 <sup>9</sup>	計	を	が
欲しい	1	金	115	0	115
	2	子供	95	4	91
	3	時間	74	0	74

	4	もの	56	4	52
	5	情報	50	3	47
好きだ	1	の	278	0	<b>278</b>
	2	こと	118	4	114
	3	人	71	<b>33</b>	38
	4	方	46	0	<b>46</b>
	5	絵	43	2	41
嫌いだ	1	の	23	0	<b>23</b>
	2	こと	19	3	16
	3	学校	12	2	10
	4	言葉	9	0	9
	5	勉強	9	0	9
分かる	1	こと	1178	87	1091
	2	行方	464	0	<b>464</b>
	3	さ	183	47	136
	4	か	176	15	161
	5	意味	135	4	131

表4：出現頻度上位5位の名詞

「金が欲しい」、「時間が欲しい」、「行方が分からない<sup>10</sup>」には、「を」の生起がなく、コロケーションを構成しているといつてよいだろう。また、「～のが好き」、「～方が好き」も同様である。表4で「を」の生起の割合がもっとも高いのは、「人を好き」の47%である。

しかし、語彙論的要因がすべてを決定しているわけではない。名詞を意味特性に応じて分類して調べると、2章で述べたことをほぼ再現することができた。分類項目は、人間、感情、代名詞、抽象、具体物、疑問節、疑問詞・不定代名詞、不定詞・節の7種類である<sup>11</sup>。表5は、述語が「分かる」の場合の「が」と「を」の分布を名詞の意味特性ごとに、実数で示している。名詞の意味的な特性は、「が」と「を」の選択に關与していることがわかる。(  $\chi^2 = 217.214$ ,  $df = 7$ ,  $p < .01$  )

名詞の意味	を	が	総計
不定詞・節	60	1113	1173
疑問詞・不定代名詞	1	18	19
具体物	7	124	131
抽象	202	2837	3039
疑問節	14	159	173
代名詞	22	86	108
感情	62	176	238
人間	29	70	99
	397	4583	4980

表5：「分かる」における、名詞の意味特性と「が」vs「を」

図3はこれを百分率で表したグラフである。「被動作主」名詞句が人間の場合には、「を」が選択されやすく、指示対象が不確定で、抽象的なものであるほど、「が」が選択されていることがわかる<sup>12</sup>。たとえば次のような例がある。

- (69) 相手を分かっていないと、不測の事態を招きかねない。
- (70) 初めておやじを分かったように思う。
- (71) 最後の1周は氷に力が伝わらないのが分かり、だめだなと思った。
- (72) 素足で乗るだけで、その人の体脂肪率が分かるそうです。

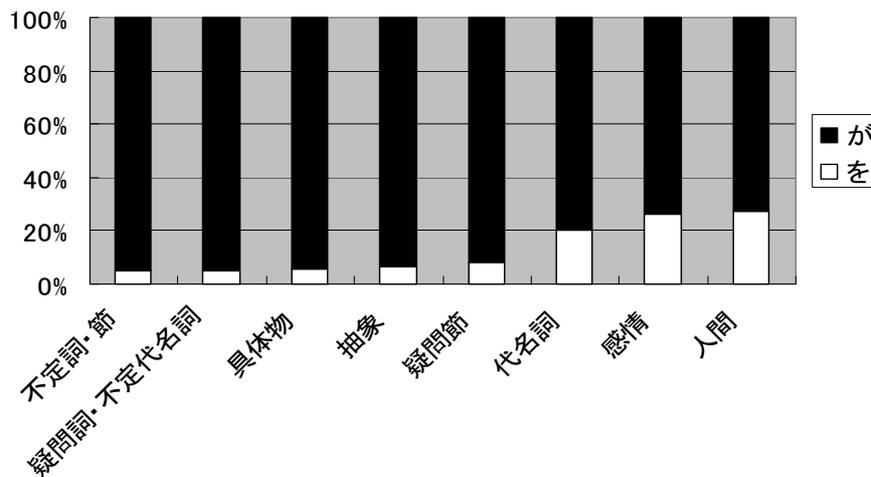


図3：「分かる」における、名詞の種類と「が」vs「を」

このデータの中で注目されるのは、名詞が人間の「感情」をあらわす次のような例において、「を」が高い頻度で選択されている点である。真の「被動作主」は、「感情」の所有者である人間と考えられる。「人間」は文法上、名詞限定的に働き、述語の項ではないが、「を」が選択されやすい理由は、その「人間」の存在に他ならないと思われる<sup>13</sup>。

- (73) 裁判所は被害者の気持ちを分かっていない。(感情)
- (74) 他人の痛みを分かる人であってほしいと思います。(感情)

表6と図4が示すとおり、「好きだ」( $\chi^2 = 265.244$   $df=2$   $p < .01$ )と「嫌いだ」( $\chi^2 = 28.4752$ ,  $df = 2$ ,  $p < .01$ )においても「分かる」と同様の傾向が観察できる。「人間」を表す語は「を」と共起しやすく、「不定詞・節」は「が」と共起する傾向が強い。「抽象名詞」の場合はその中間になる<sup>14</sup>。

	名詞の意味特性	を	が
分かる	不定詞・節	60	1108
	抽象	201	2822
	人間	29	70
嫌いだ	不定詞・節	0	30
	抽象	2	126
	人間	10	34

好きだ	不定詞・節	0	363
	抽象	45	1092
	人間	114	296

表6：名詞句の意味特徴と「が」vs「を」:「分かる」「好きだ」「嫌いだ」の場合

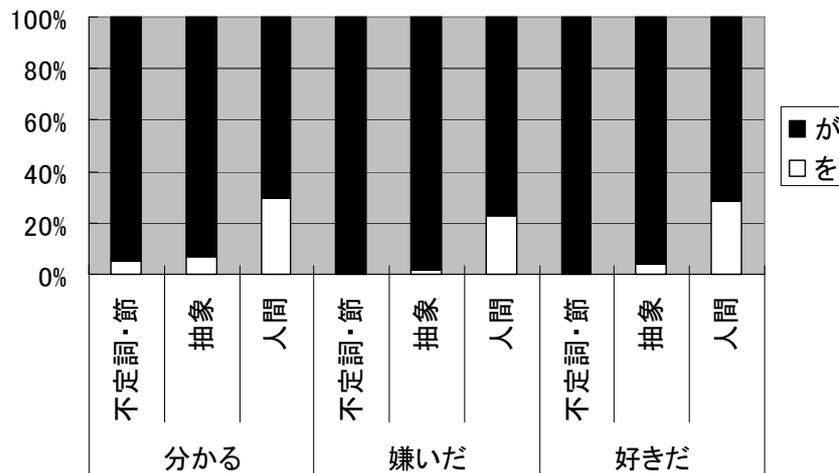


図4：名詞句の意味特徴と「が」vs「を」:「分かる」「好きだ」「嫌いだ」の場合

- (75) 「お母さんはお父さんの前に、だれか別な人を好きだったと？」(人間、を)
- (76) 先生が嫌いで、学校は面白くなかった。(人間、が)
- (77) これは、ピアノを学んでいる人だけでなく、ピアノ音楽を好きな人ならだれもが楽しめる本だろう。(抽象、を)
- (78) 家が嫌いなんやなくて、友達という方が楽しいから出ていくの。(抽象、が)
- (79) 皆さんとお話をするのが嫌いというわけではなく、ただ一人でやる方が、だれにも気がねなく、楽しいのです。(不定詞・節、が)
- (80) あなたは、マンガ本を読むことが好きですか。(不定詞・節、が)

「好きだ」と「嫌いだ」では、不定詞や節が「被動作主」の位置にある場合、「を」の用例は存在せず、例文(79),(80)のように、常に「が」が用いられている。

「動詞+たい」では、「被動作主」が人間か、そうでないかに関して、「が」と「を」の選択に関する有意差が認められた ( $\chi^2 = 4.63, df=1, p < .05$ )。

	を	が
人間以外	5566	268
人間	230	2

表7：名詞句が人間か否かと「が」vs「を」:「動詞+たい」の場合

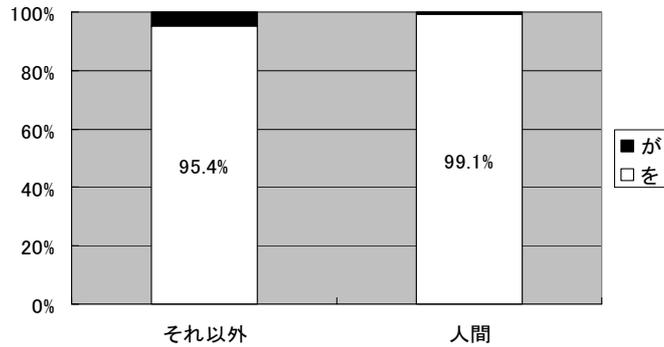


図5：名詞句が人間か否かと「が」vs「を」：「動詞+たい」の場合

述語が動詞+「たい」で、「人間」をあらわす名詞に「が」が伴うのは、以下の2例のみであり、2/230 ときわめて稀である。

- (81) Gファンだった私は「王選手が見たい」と母にねだり、住んでいた北海道北部の小さな町から片道5時間かけて球場に連れていってもらった。
- (82) 最近、これらの曲がテレビドラマやCMに盛んに用いられ始め、メンバーの周りでチューリップが見たいという声が高まっていた。

動詞はどちらも「見る」である。動詞の問題については、あとで再び触れる。

### 3.3. 補助動詞

表6は、「分かる」に後続する補助動詞の種類別の、「が」と「を」の出現傾向を表す。

	を	が	計
分からなくなる	0	618	618
分かってくる	1	309	310
分かるようになる	4	106	110
分かるようにする	8	36	44
分かってもらえる	31	53	84
分かってくれる	73	6	79
分かってもらう	95	0	95
分からなくする	16	0	16
計	228	1128	1356

表8：「分かる」に後続する補助動詞と「が」vs「を」

Makino(1976 : p.110)は、可能文に関して、次の観察を行っている。

- (83) 次第に太郎はモーツァルト(が・??を)引けるようになった
- (84) 中学を出る前に、太郎はモーツァルト(を・??が)引けるようにした。

全体として、「分かる」は可能文よりも「が」の出現傾向が強いけれども、「分かる(らない)ようにする」と「分かる(らない)ようになる」を比べると、Makino の観察と同様の傾向が観察でき、統計的に有意な差がある ( $\chi^2=8.94, df=1, p<.01$ )。

- (85) 6歳年を取って歌詞の意味が分かるようになりました。(なる、が)  
 (86) たくさんのきれいな服を見せ、『ただ布だけ織って**はだめだ**。ファッションをわかるようになれ』と。(なる、を)  
 (87) 日本語ホームページは公式ホームページを徹夜で日本語に翻訳し、翌日には前日の会議の様子が分かるように**する**という。(する、が)  
 (88) 組織的かつ巧妙にマネーロンダリングをし、使途を分らないようにした。(する、を)

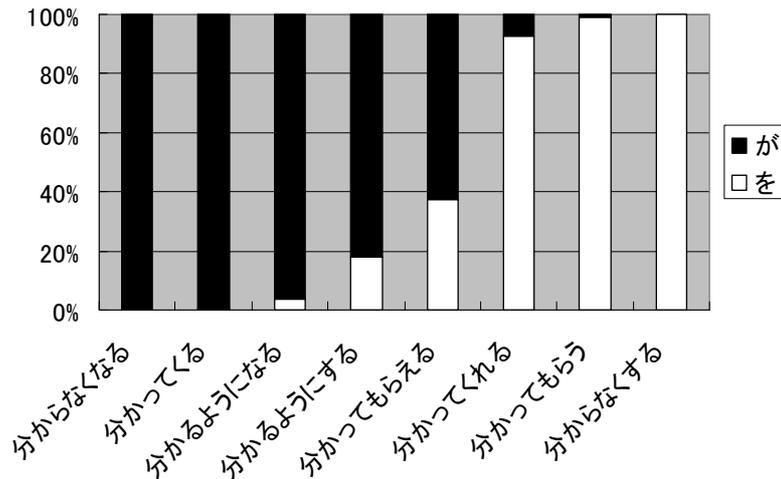


図6: 「分かる」と補助動詞

「分かるようにする」より右側に位置する補助動詞は、項の数を増やす使役的なタイプのものであり、「を」の使用は促進される。このなかで「分からなくする」と「分かってもらう」(89, 90)には、「が」の使用が1例もなく、「を」の使用は文法化されていると思われる。「分かってくれる」には、「が」と「を」の両方がある(91)。

- (89) 身元を分からなくするため、顔や指の一部を薬品で損傷した、という。  
 (90) 海外の『ZEN』愛好者に『色即是空』を**分か**ってもらうには、まず、文化理解から  
 (91) この楽器に対する先入観がないから、逆に正しく理解し**価値が分か**ってくれるのではないかと

逆に、「分かってくる」のように自動詞的な補助動詞がつくと「が」の使用傾向が強くなる(92, 93)。これらは、我々の仮説に適応した結果だと言えるだろう。

- (92) 落ち着いて考えてみると、さまざまなことが分かってきます。  
 (93) 最後はひやひやしたけど、選手がポイントでの戦いを分かってきたようだ。

しかしここで注意しなければならないのは、補助動詞「なる」は、「が」の使用を常に促進するのではないという点である。それどころか、「好きだ」「嫌いだ」に「なる」のついた「好きになる」「嫌いになる」では、つかない場合に比べて「を」の使用は大幅に増加する(例文94,95)。「好きだ」や「嫌いだ」のようなもともと「状態」を表す述語の場合、「なる」が後続すると、アスペクトが「状態」から「動態」へと変化するからと考えられる。「好きになる」という出来事がおこると、「被動作主」は、「好かれていない」

状態から「好かれている」状態へ変わる。恒常的状态を表す「好きだ」に比べて、「好きになる」は「被動作性」のより高い対象を含意する。表9は、「被動作主」が「人」という語であらわされている場合のみに限って、「が」と「を」の分布と述語の形式との関係を示している。

- (94) 福祉の現場の仕事に就きたいという人の条件は、人が好きと言うこと。
- (95) 人を好きになるって、すてきなことですよね。

	「人が」	「人を」
好きだ	30	5
好きになる	2	25

表9：「好きだ」vs「好きになる」と「が」vs「を」

図7は、補助動詞「なる」が後続する場合としない場合の「が」と「を」の分布を「嫌いだ」と「好きだ」の全用例について、百分率で表示したものである。例文96、97は、「嫌いだ」の例である。

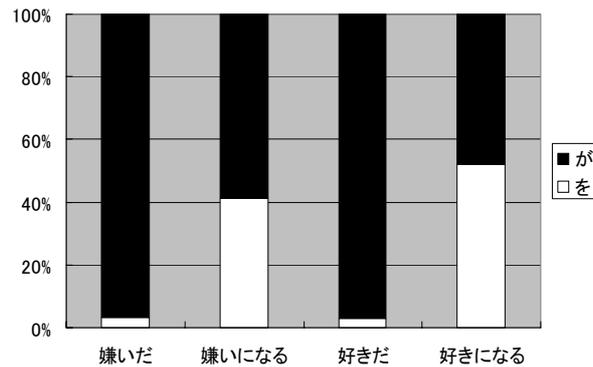


図7: 補助動詞「なる」と「が」vs「を」

- (96) 毎日同じ時間に行く、制服で全員が同じにする、という不自由さ。それが嫌いなだけだが、悪名は鳴り響いていた。
- (97) だが、「熱血」一辺倒の指導の陰でスポーツ本来の楽しさを知らないまま、それを嫌いになる子供が無視できない数で存在するのも事実だ。

### 3.4. 話法：「欲しい」の場合

「欲しい」が、主観的な述語であることは前章で述べた。「欲しい」のあとに終助詞以外の要素が何も後続せず言い切られている場合、それはもっぱら主観的な願望を表す。つまり、それは発話者本人の心的状況に関する描写であって、外界への働きかけの含意は最小である。これに対し、「欲しい」のあとに、「と思う」や「と言う」などの間接話法のマーカーがつくと、外部からの客観的な描写となり、主体の願望は相対化される。本稿の主張は、これに伴って、命題の重心も相対化され、「欲する」主体のみならず、「欲される」客体への働きかけに関する関心もクローズアップされるというものである。「という」の類、「と思う」の類が「欲しい」に後続する用例と、言い切りの用例とを比較すると、言い切りでは「が」が選択され、引用形式が後続すると「を」が選択される傾向

が、表 10 と図 8 によって明らかである ( $\chi^2 = 109.717$ ,  $df = 1$ ,  $p < .01$ )。

		を	が
直接話法・言い切り		3	864
間接話法・言い切り	と思う	12	72
	と言う	16	96

表 10：話法と「が」vs「を」：「欲しい」の場合<sup>15</sup>

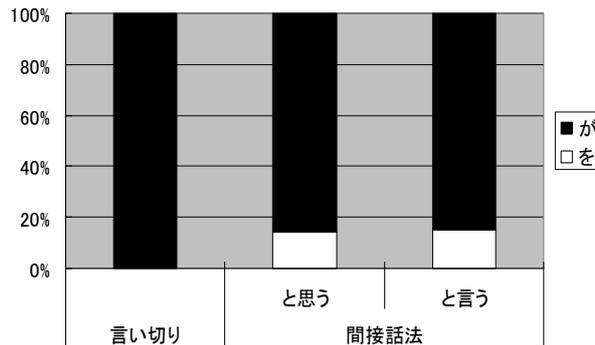


図 8：話法と「が」vs「を」：「欲しい」の場合

次のような例がある。

- (98) カーナビや冷蔵庫が欲しいなあ。(言い切り、が)
- (99) 今年こそ結果が欲しい。(言い切り、が)
- (100) ウチの社長も七十歳を過ぎて勲章を欲しいと言い出した。(間接話法、を)
- (101) ドライバーが情報を欲しいと感じるのは、自分の行こうとしている先がどうなっているかであって、東海道を行くのに東北自動車道の情報は知らない。(間接話法、を)

### 3.5. 動詞の特徴：動詞 + 「たい」の場合

願望文：動詞 + 「たい」の場合、「が」の使用は 5%未満であり、「を」の使用が 95%にのぼることはすでに見たとおりである。さらに次の表によって、「が」と「を」の選択には、動詞の種類による明確な偏りのあることが観察できる。表 8 は、頻度が上位 30 位までの動詞における、「を」と「が」の出現頻度（実数）、および、「が」が出現する割合を示している。

動詞	を	が	総計	「が」の割合
し	564	101	665	15%
見	119	54	173	31%
作り	168	1	169	1%
知り	119	30	149	20%
やり	118	11	129	9%
求め	110	0	110	0%
目指し	91	0	91	0%
つけ	91	0	91	0%

伝え	87	0	87	0%
出し	86	0	86	0%
続け	85	0	85	0%
函り	81	0	81	0%
進め	79	0	79	0%
得	78	0	78	0%
送り	78	0	78	0%
聞き	68	9	77	12%
考え	72	0	72	0%
書き	60	4	64	6%
望み	63	0	63	0%
つくり	62	0	62	0%
持ち	62	0	62	0%
取り	61	0	61	0%
決め	58	0	58	0%
見守り	53	0	53	0%
表し	53	0	53	0%
描き	52	0	52	0%
広げ	50	0	50	0%
食べ	24	25	49	51%
避け	48	0	48	0%
楽しみ	47	0	47	0%
かけ	47	0	47	0%

表 11：動詞の特徴と「が」vs「を」：動詞＋「たい」の場合

「が」との共起が観察された動詞は 8 つしかない：「食べる」（「が」の割合：51%）、「見る」（同：31%）、「知る」（同：20%）、「する」（同：15%）、「聞く」（同：12%）、「やる」（同：9%）、「書く」（同：6%）、「作る」（同：1%）。他の 22 種の動詞に「が」との共起は観察されない<sup>16</sup>。「食べる」、「見る」、「知る」、「聞く」、「飲む」は、外界のものを「動作主」に取り込むタイプの動詞である。そのプロセスは「動作主」の内部において完結し、外界に対する働きかけや、行為の結果の外界における残存は含意されない。たとえば、次のような例がある。

- (102) 母国の地を踏んだ。127日に及んだ人質生活。「すし、うなぎ、そばが食べたい」と第一声。
- (103) そんな息子も結婚適齢期。早く孫の顔が見たいのに、いまだに彼女の「カ」の字も言ってくれない。
- (104) モンゴルの草原を10日間ほど旅して、ウランバートルに帰った日、無性に日本のことが知りたくなった。
- (105) 駆けつけた知人(31)は今も、神戸にとどまり、活動を続けています。久しぶりの便りに、声が聞きたくなくて電話したところ、「仮設住宅の被災者にとって具体的に明日が見える行政であってほしい」と
- (106) この検査の途中で、大蔵省側から同行の担当者に「冷たいものが飲みたい」との話があったという。

逆に高頻度で出現しながら、「が」の生起がない動詞の例は以下のとおりである。まず「求める」「伝える」「送る」のような3項動詞がある(例文 107,108)。また、「つける」「出す」「続ける」「進める」のように対応する自動詞との間に形態的対立の存在する動詞がある(例文 109,110,111)。さらに、「目指したい」や「図りたい」、「望みたい」のような、発話と同時に行為が行われるいわゆる「遂行動詞」に近い用法では、「を」が使用される(例文 112,113,114)。

- (107) 「それだけ高い濃度の数値が出たのであれば、県に事実関係の説明を求めたい」と話している。
- (108) これまで大人がうかがい知ることができなかった“真の14歳の心”を伝えたい」と話している。
- (109) 宗茂監督は「まずトラックの5000メートルを走り込み、スピードをつけたい」と語り、早ければ来年の大阪国際女子マラソンか好記録の出やすいロッテルダムマラソンで初挑戦する構想を明らかにした。
- (110) 準々決勝戦で西京を抑え込んだ長崎伸一投手は「投げる機会があれば、自分の持ち味を出したい」ときっぱり。
- (111) 今日は守り切った。これで2位のオリックスと3ゲーム差？こんな試合を続けたい。
- (112) そのためにも、健康や環境に配慮したホテルづくりを目指したい。静かな口調の中にも、自信がのぞく。
- (113) 訪朝を実現させることで社民党との信頼関係回復を図りたい
- (114) 早急な改善を望みたい。

### 3.6. 名詞の特徴：「したい」の場合

「たい」に前接する動詞の中でもっとも頻度が高いのは「する」であり、「が」を 101 例、「を」を 564 例、観察することができた。

名詞	を	が	計
仕事	56	23	79
話	22	9	31
何	25	2	27
こと	19	2	21
努力	19	0	19
試合	15	3	18
野球	11	3	14
勉強	10	3	13
活動	11	0	11
対応	10	0	10

表 12：名詞の特徴と「が」vs「を」：「したい」の場合

高頻度で出現する名詞の中では、「努力」、「活動」、「対応」において、「が」が一例も出現していないことが注目される。(115)(117)は、政治家や行政官が多用する言い回しである。「努力する」、「対応する」と他動詞の終止形の言い切りで表現しても、意味はほとんど変わらない。「たい」を使って願望を装うことにより、実現の保障を回避しているが、「が」を使用して、本当の願望の表現とするには及ばないニュアンスかと思われる。

- (115) 池田行彦外相日米安保条約の義務履行に支障が生じないよう、日本政府として最大限の努力をしたい。
- (116) 登録されているのは県内に住む60歳以上で、自分の特技を生かしてボランティア活動をしたいという人たち。
- (117) 会議の後、窪田村長は役場で会見し、「捜査本部から公式発表があり次第、何らかの対応をしたい。

続いて、31例の生起のあった「話が/をしたい」の例を以下に掲げる。「話がしたい」の場合、「話」の内容は特定化されず、activityとしての「おしゃべり」がしたい」というニュアンスをもつ傾向があるのに対し(例文118, 119)「話をしたい」の場合の「話」は、具体的に定まった「話」の場合が多い(例文120, 121)。「被動作主」名詞句の限定の度合が、「他動性」の要因として重要であることはこれまでに繰り返し言われてきたことであるし、また、前節で述べたことでもある。

- (118) 同センターには、深夜0時ごろに決まって「話がしたい」「さみしい」という子どもの電話がかかる。
- (119) 「死ぬまでに、一度、子供たちと話がしたい。でも、怖いなあ。『まだ、生きていたのか』と言われそうで」
- (120) 「インターネットのモニターに選ばれた。お会いして話をしたい」。こんな誘いかけに応じたところ、必要もないのに高額のパソコンなどを送りつけられてしまった、という消費者被害が増えている。
- (121) 2人は「被害の実態を自分たちの目と耳で確かめ、祖母と日中戦争の話をしたい」と話している。

### 3.7. 人称

最後に、「動作主」、「被動作主」名詞句の人称の問題を検討する。我々は、前章で、第2項名詞句が、発話者にとって重要な「被動作主」である場合に他動性が高く、そうでない場合には他動性が弱いという、修正版の「他動性仮説」を提案した。ここで見る人称の問題は、この提案の必要性を端的に示している。というのは、Hopper&Thompson(1980)の提案による他動性仮説によると、他動性の高い命題の「動作主」は、もっとも卓立した名詞句であらねばならず、この点において、以下に述べる事実と矛盾すると思われるからである。

表13は、述語が「好きだ」「嫌いだ」「分かる」「欲しい」のときに、「動作主」が1人称である場合と3人称である場合とにわけて、「被動作主」の人称別に、「が」と「を」の出現傾向を調べたものである。3人称名詞としては、指示対象が「特定の人間」であり、しかも固有名詞ではないものだけを考慮に入れている<sup>17</sup>。

まず、すでに3.4.の話法の節でも触れたが、「動作主」が1人称の場合(例122-125)と3人称の場合(例126-129)とを比べると、1人称に「が」が多く、3人称には「を」が多いことがわかる<sup>18</sup>( $\chi^2=14.38, df=1, p<.01$ )。続いて、「動作主」の人称ごとに「被動作主」の人称を見る。「動作主」が1人称のときには、「被動作主」が「自分」である場合(例125)に、特に「を」の出現傾向が高く、他の場合(例122-124)との間には有意な差がある( $\chi^2=20.52, df=1, p<.01$ )。一方、「動作主」が3人称の場合には、「被動作主」が、2人称(例127)、1人称(例128)、「自分」(例129)の場合に、「を」の出現傾向が高く、「被動作主」が3人称の場合(例126)との間に差がある( $\chi^2=4.06, df=1, p<.05$ )。

動作主	被動作主	を	が
1人称	3人称(人間・定) 固有名詞を除く	13	46
	2人称	2	33
	1人称	2	4
	「自分」(=動作主)	25	22
1人称合計		42	105
3人称	3人称(人間・定) 固有名詞を除く	15	17
	2人称	4	1
	1人称	7	4
	「自分」(=発話者, 共発話者)	8	2
3人称合計		34	24

表 13: 人称と「が」vs「を」

- (122) 非常に残念なのは、ああいう結果(全員死亡)に終わったことだ。私は彼らのことが好きだったし、彼らの考えを変えようとしたが、結局できなかった。(動作主: 1人称、被動作主: 3人称)
- (123) あなたが好きですから、あえて申します。あなたは首相を辞めるしかないのです。(動作主: 1人称、被動作主: 2人称)
- (124) 「丸山ワールド」から飛び出てきたようなカップルを“観察”すると、「彼といて幸せそうな私が好き」といったふうに映る。(動作主: 1人称、被動作主: 1人称<sup>19)</sup>)
- (125) 今はまだ心から 自分を好きになってはいないけれど、こんなふうに時に深く自分の中に落ち込んでいく自分を少し許せるようになりました。(動作主: 1人称、被動作主: 「自分」(=動作主))
- (126) 心の底では父親が好きなのです。子供は子供なりに父親のことを分かっているのです。(動作主: 3人称、被動作主: 3人称)
- (127) 通りかかったタクシーで難を逃れたが、女性の同僚に相談したら「彼はあなたを好きだったんじゃないの」と笑われた。(動作主: 3人称、被動作主: 2人称)
- (128) 鳩山氏「菅さんが本当に私を好きか、わかったものじゃないが、そんなことはどうでもいい。(動作主: 3人称、被動作主: 1人称)
- (129) 男性が自分のことを好きでいてくれないと、自分からは近づいていけないタイプなんです、私は。(動作主: 3人称、被動作主: 「自分」(=発話者))

3.3 で見たように「くれる」は「を」の使用を増加させるが、それは規則ではなく、例文(130)のように「が」が選ばれる例も存在する。「くれる」は、「被動作主」に発話者の主観性のターゲットがあることを示す表現であるので(例 131)、人称と同様の効果を生み出して「を」の使用を促進するのだと思われる。

- (130) 見学する子供たちの姿に、お父さんたちは「少しは忙しい仕事が分かってくれたかな。でも、今日は早く帰宅しよう」
- (131) 「これまで中国人と一緒にやってきた。大丈夫だと信じたい。でも中国政府は

ユーモアを分かってくれるだろうか」パトゥア語での風刺劇を続けたいミゲルさんは、少し心配そうだ。

ここでみた事実は、「が」「を」の選択は、助詞の接続する名詞句の特徴にのみ依存しているのではなく、命題全体の問題であることをよく示している。図9が表すように、「動作主（主語）」よりも主観性の点で、発話者に近い名詞句が「被動作主（対象）」の場合には、「を」が選ばれる傾向があり、「動作主（主語）」の方が「被動作主（対象）」よりも発話者に近いか、または同等の場合には、「が」が選ばれる傾向がある。一言で言い換えると、「動作主（主語）」よりも、大事な名詞句が「被動作主（目的語）」のときには、「を」を使ってマークする傾向があるということである。

		被動作主（対象）			
		「彼」	「あなた」	「私」	「自分」（発話者）
動作主 （主語）	「私」	が			を
	「彼」	が	を		

図9：主観性と「が」vs「を」

### 3.8. 結論

以上、毎日新聞コーパスを利用して、「が」と「を」の交替を記述した。明らかになった「が」と「を」の選択の条件は表14のようにまとめられる。

	「が」が好まれる	「を」が好まれる
述語	単純述語：「欲しい」 「好きだ」 「嫌いだ」 「分かる」	複合述語「たい」
構造	動詞＋「たい」	名詞＋「したい」
「被動作主」の性質	「食べる」「見る」「知る」 対象	「つける」「出す」「続ける」 対象
	不特定	特定
	人間以外	人間
	不定詞・節	不定詞・節以外
	自発の対象 （「分かる」の場合）	使役の対象 （「分かる」の場合）
	3人称	1人称
「動作主」の性質	「他」	「自分」
	1人称	3人称
アスペクト	願望の主体	意志の主体
ムード	状態	動的
	非現実 潜在的	現実 顕在的
他動性	弱	強

表14：「が」と「を」の交替の条件：毎日新聞による結果

述語によって条件が異なるためにより厳密な設定が必要であることや、具体物と抽象

の間の差異には有意な違いが見られなかったこと、語順の問題を主題性の枠組みで捉えることには再検討の余地があることなど、修正は必要であるが、これらの条件は藤村が表1で提案した条件と本質において異なるものではない。大規模コーパスの検索結果は、「が」と「を」の交替を「他動性」を再定義によって説明しようとする、図1で示した結論を支持しこそすれ、くつがえすものではないと考えられよう。

再度繰り返すが、この表の中の項目のうち、H&Th の提案による他動性仮説に照らした場合に問題となるのは、「人称」である。「被動作主」が「3人称」であるよりも、「自分自身」である場合の方が他動性の度合いが高いというのは、素朴な「自他」の考え方からすると矛盾と感ぜられるだろう。一般に、「他動性」の強さは「動作主性」の強さの延長上に捉えられることが多いが(ヤコブセン(1989)など)、その考え方の背景にあるのは、人間、そしてその代表としての発話者 = 「私」は、典型的には「動作主」であるという考え方である。「動作主」に意志とパワーがあれば、「動作主」の影響のおよぶ範囲は大きくなり、影響の強さも大きくなり、したがって「他動性」は強くなると考える。しかし、人間はまた、典型的な「被動作主」でもある。「自分自身」が被動作主の場合に「他動性」が強くなる理由は、明白である。発話者が他に与えた影響に比べて、発話者本人に与えられた影響は、発話者にとって重大であり、強く感ぜられるに違いないからである。他動性」の本来の定義である「ある行為が他に影響を及ぼす度合」に立ち返るなら、「動作主」を固定した上での、被動作主に与える影響の多寡という考え方にこだわる必要はないはずである<sup>20</sup>。

もう一度、例文122と129を見よう。122も129も「私」に関する叙述が行われている。122では、動作主(主語)である「私」に関する叙述であり、「彼ら」は「私」に関する叙述のアクセサリーにすぎないため、「が」でマークすればよい。「を」に変えることも可能であるが、そうすれば、「彼ら」の重みは増す。一方、129では、被動作主の「自分」についての叙述である。この例では、「を」を「が」に変更することは難しいと感ぜられる。動作主の「男性」は聞き手には知られていない人物であり、重要な役割を担ってはいない。「自分」は中心的な役割を担っているため、「を」によってそのことがマークされなければならない。

- (122) 非常に残念なのは、ああいう結果(全員死亡)に終わったことだ。私は彼らのことが好きだったし、彼らの考えを変えようとしたが、結局できなかった。(動作主:1人称、被動作主:3人称)
- (129) 男性が自分のことを好きでいてくれないと、自分からは近づいていけないタイプなんですね、私は。(動作主:3人称、被動作主:「自分」(=発話者))

#### 4. おわりに

1989年の論文においても、実例の調査を行ったが、例文の総数は約150例であった。2004年には、扱った例文は、可能文を含まず、述語の直前に名詞の来るものだけで、20000例を超えた。20000例に基づいた議論が、150例に基づいたものより信頼性が高いことに疑いの余地はない。そのことは、理論的な面と、言語記述の面の両方において言えるが、とくに、言語記述の面では、これまでに行い得なかった詳細な記述が可能になった点において、その貢献は著しいと思われる。2004年の調査後に、1989年の論文を見ると、次の点が批判される。

- 述語によって、性格が異なることが考慮されていない。「好きだ」と「嫌いだ」は傾向が似ている。「欲しい」は異なる。「欲しい」の対象は、ほとんどが不特

定であるのに対し、「好きだ」と「嫌いだ」の対象は特定のだからかもしれない。「分かる」、「出来る」も当然ながら、これらとは異なる。1989年に行ったような、一括した議論ではなく、個別の述語ごとに細かく条件を検討することが必要であろう。

- 「動詞+たい」の場合に、「が」が選ばれるのは、名詞が「具体的なもの」の場合が多い。抽象名詞はむしろ「を」と共起しやすい。他動性の要因のひとつとして、「個性」が一般に支持されているが、この要因に関しては熟慮が必要である。動詞の種類に関しても、アスペクトや意味に関してより深く考える必要がある。
- 主題性、情報量、語順に関しては、さらに調査を行ったうえで熟慮が必要である。
- 「名詞+したい」、つまり漢語動詞の場合に、「が」が選択されない強い傾向に関して考察が必要である。

さらに、今回の調査は、新聞という特定のジャンルのテキストのみを対象としたので、ジャンルを広げた調査もまた必要と思われる。

#### [参考文献]

- Aoki, S. (1984) : "A propos de désidératif – *tai* en japonais contemporain", in *Recherches en linguistique japonaise*, Coll. ERA 642, Univ. Paris7, p.107-142.
- Bally, C. (1926) : "L'expression des idées des père personnel et de solidarité dans les langues indo-européennes", in *Festschrift Louis Gauchat*, Aarau, p.68-78.
- Bybee, J. & P. Hopper (ed) (2000): *Frequency and the Emergence of Linguistic Structure* (Typological Studies in Language), Benjamins.
- Fujimura, I. (1989) : "Un cas de manifestation de degré de transitivité : l'alternance des relateurs GA et O en japonais", *Bulletin de la Société de Linguistique de Paris*, 84-1, p.235-57.
- 藤村逸子 (1989) : 「他動性再考 使役構文内での格付与の問題をめぐって」、『フランス語学研究』23、p.40-54.
- 藤村逸子 (1993) : 「所有者と与格」、『< 特定研究 > 情報とコミュニケーション』,名古屋大学言語文化部、p.25-42.
- Haig, J. (1979) : "Real and apparent multiple subject sentences", *Papers in Japanese Linguistics*, 6, p.87-130.
- Hopper, P. & S. Thompson (1980) : "Transitivity in Grammar and Discourse", *Language* 56, p.251-299.
- 井上和子 (1986) : 「格付与と意味」、『月刊言語』15-3,p.102-111.
- 国立国語研究所(1951) : 『現代語の助詞、助動詞 用法と実例』、国立国語研究所報告3, 秀英出版
- Makino, S.(1976) : "On the Nature of the Japanese Potential Construction", *Papers in Japanese Linguistics*, 4, p.97-124.
- 佐久間鼎 (1940) : 『現代日本語法の研究』、厚生閣
- 柴谷方良 (1976) : 『日本語の分析』、大修館
- Sugamoto, N. (1982) : "Transitivity and Objecthood in Japanese" in *Syntax and Semantics* 15, P. Hopper & S. Thompson(ed), Academic Press.
- Tesnière, L. (1959) : *Eléments de syntaxe structurale*, Klincksieck.

ヤコブセン、ウェスリー・M、(1989):「他動性とプロトタイプ論」,久野・柴谷編『日本語学の新展開』くろしお出版, p.213-248.

## [注]

- <sup>1</sup> P. Hopper、S.Thompson は、出現頻度を重視した言語研究を進めている。Cf. Bybee, J.&P.Hopper (ed) : *Frequency and the Emergence of Linguistic Structure (Typological Studies in Language)* 2000.
- <sup>2</sup> 「が」と「を」の交替だけではなく、フランス語のいくつかの言語現象に関しても他動性を、目的語名詞句の「被動作主」としての卓立性と定義する方が適切であることがわかった。(cf: 藤村逸子(1989))
- <sup>3</sup> Bally, C. (1926)の、Sphère personnel (人間の領域)の考え方がもとになっている。
- <sup>4</sup> この点に関して、現在筆者は違う考えをもっている。「この酒はのめる」に、動作主の情報加わると、C1+C3+Pとして実現すると思われる。たとえば、「この酒はだれにでも飲める」。語順を考慮すべきであろう。
- <sup>5</sup> 数字 a 数字 b における、数字 a と数字 b は、対応する例文を容認したインフォーマントの数を示している。
- <sup>6</sup> 「～ことができる」は省いている。また、可能文、「わかる」、「できる」においては、「動作主」が「に」でマークされているものは、省いてある。それ以外のすべて、つまり「動作主」が省略されているもの、「動作主」が、「は」でマークされているものは、数に入れてある。
- <sup>7</sup> 当然のことであるが、検索プログラムは万能ではない。たとえば、「茶漉」では、「たい」を「全活用形」を指定しても、満足のいく検索結果は得られなかった。「たい」に関しては、「全活用形」以外に、(たい|たか|たく|たけれ)も指定して検索し、重複行は後に削除した。「全活用形」の指定は、「やめてしまてえ」などの意外な例文も拾ってくれるという利点があるからである。
- <sup>8</sup> 新聞以外では、「～が名詞したい」は発見できる。新潮文庫の100冊(1950年以降のみ)では、「～を名詞したい」の41例に対して、「～が名詞したい」は次の2例が存在している。
  - 食後のコーヒーを飲みながら彼女はいろいろ自分の今後の計画を話し、ジャズが勉強したいといった。ジャズは年来の宿願らしく、彼女はくりかえしくりかえしその希望を語った。(開高健『パニック・裸の王さま』)
  - しかし、それを個々別々に各個の行動、各個の独断専行では有難くないから陸軍省の命令をくれんか、政府の命令をくれんかという即ち我等の行動が、自分の行動が真に国家の御用に立つという行動であるという満足の下に忠誠心が発揮したいのじゃないかと思えます。(阿川弘之、『山本五十六』)
- <sup>9</sup> 本稿では、形態素解析システム『茶筌』によって解析された形態素を、1言語単位とみなす。したがってこの中には、「一人」や「受取人」などにおける複合語の構成要素の「人」なども含まれている。
- <sup>10</sup> 肯定文は、480例中次の1例しか存在しない。「スタート後、2-3キロで勝敗の行方が分かるほどだ。」「分かる」は一般に、否定文で使われることが極めて多い。可能文も同様と考えられる。
- <sup>11</sup> それぞれの意味特性に対応した名詞(形態素)を頻度順に挙げ、例文をいくつか掲げ

---

る。「分かる」と「欲しい」の両方を含む)

人間：子供、人、自分、～のこと、者、子ども、あなた、選手、君、人間、さん

ex：子どもが欲しい。

病気の人を助けてたい。

感情：気持ち、心、痛み、真意、喜び、苦労、心情、愛情、苦しみ、思い

ex. 他人の気持ちがわからない。

他人の上に立つ人は、他人の痛みを分かる人でなきゃ。

代名詞：それ、これ、そこ、あれ、アレ、そのもの、コレ

ex：それをわかってもらうためにもがんばります。

そこが分かっていない。

抽象：行方、～さ、こと、意味、仕事、方、言葉、力、野球、情報、原因、理由

ex. 面白さが分からないヤツはそれでいい。

言葉の意味が分からなくなった時に、

不調の原因が分かっていたら改善できるのでは？

不定詞・節：～こと、～の、

ex：そして筆と紙、墨汁を自由に使うのを許したいのです。

人が喜ぶことが好き。

3、4日見ないと、大きくなったのが分かる。

具体物：金、もの、時間、絵、本、顔、お金、家、姿、道、酒、車、目、手、学校

ex：身体をあたためるものが欲しい

ああ、もっと、もっと広い家が欲しい。

疑問詞・不定代名詞：何、～か、の、どこ、どちら、なに、どっち、ところ

ex：誕生日の贈り物に何が欲しいか尋ねたところ、

それによって何かがわかるはずだ。

疑問節：疑問詞+か、～かどうか

ex：原爆とは何だったのかを考えてたい

親や先生を殴ることが良いか悪いかが分からないまま、

- 12 「分かる」は、C3+C1+Pのタイプの構文をつくることができる。この点については、データを観察し、「可能文」も考慮に入れた上で、考察を続ける必要である。現段階でいえることは、C1+C1+Pも、C3+C1+Pも、C1の特徴に関して、大きな差はないように思われるということである。
- 13 類似した現象は、ヨーロッパの様々な言語で観察される所有者をあらわす与格や、日本語の敬語表現にも見られる。Cf.藤村(1993)。
- 14 「欲しい」では同様の傾向は観察されなかった。
- 15 補助動詞、および、アスペクト・モダリティ要素を伴わない場合のみを対象にしている。これを「言い切り」と呼んでいる。
- 16 名詞の例は頻度順に次の通り。

(仕事/話)(が/を)したい

(顔/姿)(が/を)見たい

(物/映画)を作りたい

(～こと/～か)(が/を)知りたい

(～こと/野球)(が/を)やりたい

(説明/～こと)を求めたい

---

( ~づくり / 上 ) を目指したい  
( 気 / 弾み ) をつけたい  
( ~こと / ~さ ) を伝えたい  
( 結論 / 結果 ) を出したい

- 17 固有名詞を省いた理由は、固有名詞の中には、有名人や、本や絵の作者(たとえば、ゴッホ、福沢諭吉)などが含まれ、分類が容易でないからである。「たい」を省いた理由は、この条件下では、「が~たい」の例は存在しないからである。
- 18 比較のために「好きだ」の例のみを挙げる。
- 19 ここには、話法の問題もからむ。1人称と「自分」の間に差異が存在するかどうかという問題などもあるが、ここでは議論しない。
- 20 しかし、このような定義による「他動性」も、ある限界を超えると、1項的なものになるはずであり、理論的には難しい問題がある。